平成四年三月一日発行（毎月一日一回発行）

經濟論叢

第149巻　第1·2·3号

哀　　辞
故山岡亮一名誉教授遺影および略歴
いわゆる「コンツェルン」考……下谷政弘　1
G・マリーンズの外国為替論（2）……本山美彦　21
マレーシアの原木資源と輸出代替化戦略の問題点……中島健二　40
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と
　日米合弁企業の位置づけ（3）……石川康宏　67
短期調整過程の二類型（2）……森岡真史　79
利益処分会計と剰余金処分会計……藤井　深　97
多属性効用分析の集団意志決定への拡張……朴　時炫　113
ケインズ・利潤・貨幣……服部茂幸　140
外部効果と保護政策下の国民経済の形成……松尾昌宏　155
1930年代朝鮮における総督府の農村統制……朴　ソプ　171
追　憶　文
山岡亮一先生を偲ぶ……関　順也　189
山岡亮一先生を偲んで……中野一新　193

平成4年1·2·3月

京都大學經濟學會

追　憶　文

山岡亮一先生を偲ぶ

関　順也

私が初めて山岡先生の研究室を訪ねたのは，昭和26年春，旧制京大経済学部に入学してから半年近くも経てからであり，それまでは山岡先生が何を研究しておられるのかも知らなかった。

私は台湾から引揚げてきて女学校の教師となり，生家では僅かばかりの小作地と手作りに依存してきたのだが，入学当時，これからの日本ではどのように生きて行けば良いのかがわからなかった。山岡先生を訪ねたのもそれを教えていただくためであった。だがこれは山岡先生にも即答できない大きな問題であるとおっしゃって，とりあえず参加してみないかと誘われたのが，同年８月から始められた奈良県野迫川村の山村調査であった。

これについては，先生が著書『学窓の灯』にくわしく書いておられる通りで，医学部の西尾雅七先生や探検家としても著名な文化人類学者今西錦司先生等，何れも酒豪としても有名な先生方が調査に数多く参加された。したがって，そのお相手をせねばならぬ立場にあった山岡先生が最も苦労なさったのではなかろうか。もっとも，酒席にいつも最後まで残ったのは，文化人類班の梅棹忠夫氏や経済班の私共など，若手の研究者グループであった。これは若手が酒に強かったからではなく，酒が少なくて若手のところまで十分にはまわらなかったからである。そこで残った若者達だけでお互いに未来への抱負を語り合ったことは，後々までも忘れ得ない貴重な体験であった。

調査終了時の地元の人々への御礼まわりは山岡先生にお願いして，私たちは先生の後で小さくなっていたが，地元の人々がみんな笑顔で送って下さった御好意は本当にうれしかった。

翌昭和27年には，科学研究費が支給されることになって，「関君もう一度龍神へ行って見よう」と山岡先生から言いだされたときには，感激で胸が一杯になった。私自身の研究目的から言えば，行く先々の宿舎で山村の文書を見せてもらい，それを筆写してお

きたかったのだが，前年の野迫川調査では何もできなかったということを先生は御存じであり，龍神村でその補足をさせて下さるのだなと気づいたからである。日中は有田川沿いに歩きつづけ，予定の宿舎につくと，古文書を筆写するのが私の仕事なのだが，先生はそれにもつき合って下さって，「関君，これは何と読むのかねえ」などと話しかけられるので，かえって閉口したことも覚えている。

この昭和27年には，亀岡市宮前村の砥石山の調査のほかに，与謝郡の筒川村と本庄村，それに伊根町の漁村蒲入の調査にも参加した。私は，山岡先生の御推挙で山口大学経済学部への就職がきまっていたが，この1年間だけは京大で勉強してもよいということが条件になっていた。そこでこれらの農村漁村調査にも専念して，その取りまとめを担当することもできた。

この年の調査にも数々の思い出がある。漁村蒲入から宮津まで漁協の船で送ってもらえるというので皆が大喜びをしているのに，山岡先生だけが青い顔をしてしょんぼりと坐っておられた。そこで私が「どうしたのですか」ときくと，「昨夜は漁協の皆さんがつぐ酒を全部まともに飲んでいたら気を失ってしまった」ということであった。農村育ちの私には，その場のふんいきがすぐにぴんときたので，「田舎では相手が押しつけてくる盃を適当に受け流していくのが常識で，つがれる盃をみんな飲んでいたら倒れるのが当り前です」と生意気なことを申し上げたことも覚えている。だがこのように生真面目な山岡先生のお人柄が大好きになったのも確かである。

昭和28年には，私は家族を連れて山口大学経済学部に赴任したが，夏休みになるのを待ちかねたように帰洛し，「山岡ゼミ」に加えていただき，その夏の農山村調査にも参加させてもらった。しかしその後，山口大学での職責がしだいに重くなり，あまり身軽に京都へ帰ることもできなくなってきた。そこで，山口大学の私のゼミ室でも農村調査をやろうということになり，昭和29年夏には，農民層分解が進んだと思われる裏門司農村をとりあげてみた。そして，その調査結果をまとめて発表したのが同年の山口経済学雑誌にのせた論文「近郊農村における階層分解の一類型」であり，これは後に農林省の『農村経済研究年報』にも採択されて大喜びをしたものである。その調査方法の特色の一つは，調査対象たる村落の悉皆調査をしていることであり，参加した学生諸君が一戸一戸の農家を訪問してくわしく聞取ったものである。もう一つの特色は，その村の古文書を集めてできるだけ詳細にその歴史的な経過を明らかにしようとし，これには私自身

があたることにしたが，これらはみんな山岡先生から学んだものである。

この時期の私は，昭和30年の社会経済史学会で，「幕末における農民一揆——長州藩の場合」と題して発表し，翌31年には論文「地租改正の歴史的意義——山口県地租改正を中心として」を京大の『経済論叢』に掲載したほか，拙著『藩政改革と明治維新』が有斐閣から単独出版されることにもなったが，その何れもが山岡先生の御配慮によるものであった。やがて私の勤務する大学も，昭和32年に母が死亡したのを契機として，郷里に近い京都学芸大学（現在の京都教育大学）にかわることになった。

京都にかえってからの私は，京大の河野先生や飯沼先生等による「日本資本主義」研究会に加えていただき，やがて後に，ミネルヴァ書房から『資本主義への道』（共著）や『明治維新と地租改正』（単著）などを出版することになったが，「山岡ゼミ」にも引きつづき出していただき，夏休みの農村調査等には必ず参加させてもらっていた。

昭和39年から40年にかけて，山岡先生が学生部長に就任しておられたおりには，私もたびたび京都教育大から駈けつけて，いざという場合に備えていたのだが，とつとつと学生達を説得されている山岡先生の姿は今思いだしても涙が止まらない。これこそ学生教育に当らねばならぬ教師のあるべき姿なのだという思いが，私の胸にいまも深く深く焼きついている。

昭和46年には，これから始まろうとする東京の創価大学に私も招かれ，その経済学部長をひき受けようとして山岡先生のもとへ相談にいったところ，その場できびしく反対された。山岡先生が言われるには，「私は宗教そのものに反対しているわけではない。だが今の君は京都大学から学位をもらったばかりで，いよいよこれから研究を深めねばならぬ大切な時に，新設大学の学部長などを引受けたら，必ずや研究生活が駄目になるだろう」ということであった。

私もそのことが一番心配だったので，創立者の池田先生から依頼をうけた時に，「どんな大学をつくるのですか」と質問したところ，池田先生は「師弟不二，吉田松陰先生の松下村塾のような大学をつくってほしいのだ」と答えられたことなども報告して，やっとの思いで山岡先生に認めていただいた。その山岡先生が，昭和57年の土地制度史学会の会場となった創価大学においでになったおりには，私のゼミ室で学生達に短かいお話までして下さった。そしてその夜の歓迎会でもらされた一言は今も忘れられない。立派な設備や多くの教員のことなどについては何もふれられないで，「明るく素直そうな

よい学生がそろっているね」という一言であった。

最後に，山岡先生と松井浄蓮先生の関係についても一言ふれておきたい。松井先生のことについては，先生が『学窓の灯』で詳しくふれておられるのでまずそこから引用させていただくことにしよう。

> 高知に赴任する前の私（山岡先生のこと）は，大学では紛争に悩まされ，同時に“小農”という生涯の学問的なテーマに関わる問題でなやみ，怒りを胸に抱きながら毎日を送りました。そんな時にいつも思い浮べる一人の人物がおりました。松井浄蓮氏。小農はどうあるべきか――を考え抜き，
>
> 「大自然に直接抱かれ，スキ，クワとって自分の食うものは自分がつくる。そうしてその生きた上での余裕をもって，少しでも他人さまに喜んで預けるようなことをする。」を実践し，農業のありかたを求めて独特の生活を行っている人です。宗教家のような趣もある人で，ある意味では私が小農問題を考える時，必ず心の中に登場する人でもあります。

『学窓の灯』の中のこの文章をみて，生前の先生を思い浮べて溢れでる涙を止めることもできない。今となっては何年前のことであったかも覚えていないが，久しぶりに北白川のお宅を訪ねたところ，「頂度良いところに来た。これから珍しい人に会わせてあげるから一緒に来なさい」と言われ，先生のお伴をして訪ねたのが松井浄蓮先生にお目にかかった最初であった。

その松井浄蓮先生に久しぶりにお会いできたのが，昨年11月の山岡先生の仏事のときであり，私は既に創価大学を定年退職して，亀岡の生家に戻っていた。高知での先生のお葬式の時にも遠くから目礼しただけであり，いつの日にかまた，山岡先生のお伴をして日本農村の将来を語り合った当時の思い出を語合ってみたいと願っている。

亀岡の私の生家では，山岡先生が書き残された「耕心」という飾皿をいつも大切に床の間に置いていることをつけ加えて結びとしたい。